

NEWSLETTER #134

日本ポピュラー音楽学会

vol. 35 no. 3 Sep 2023

p.1 第35回 日本ポピュラー音楽学会年次大会 JASPM35 開催のお知らせ福永健一

p.5 2023年度第2回 オンライン例会報告中條千晴

Information

p.8 事務局より
会員動静第35回日本ポピュラー音楽学会年次大会
JASPM35 開催のお知らせ

【ご挨拶】

大会実行委員長 福永健一

JASPM 第35回大会は、2023年12月9日（土）、10日（日）に、四国学院大学で開催いたします。タイムテーブルは近年の大会に倣い、9日午後に個人研究発表と総会、10日午前にワークショップ、午後にシンポジウムを行います。シンポジウムは、三井徹先生を偲ぶ会を企画しました。研究者、教育者としての三井先生の仕事を振り返り、われわれが引き継ぐべきことを考える場にしたいと思います。登壇者は、三井先生と関わりの深い方々にお願いしました。司会には JASPM 設立時のメンバーである小川博司氏、パネリストには三井先生のもとで学ばれた西島千尋氏、野澤豊氏、エドガー・W・ポープ氏にご登壇いただきます。フロアからも、三井先生との思い出やエピソードなどを積極的にお話したいと思っています。

四国学院大学のある香川県善通寺市は、古くは弘法大師生誕の地である善通寺の門前町として、近代は陸軍第十一師団が設置され軍都として栄えました。近年は、お遍路やうどんブームで県の内外から多くの人が訪れます。

のどかな地方都市の小さなキャンパスですが、アクセスはそう悪くありません。

今大会は、2019年度の JASPM31 以来4大会ぶりの全日対面開催です。12月に四国学院大学で皆様とお会いできることを楽しみにしております。

日時：2023年12月9日（土）、10日（日）

会場：四国学院大学

〒765-0013 香川県善通寺市文京町 3-2-1

・会場へのアクセス

四国学院大学（香川県善通寺市）へのアクセスは、電車、高速バス、車の利用が便利です。JR 土讃線「善通寺駅」から徒歩5分、JR 四国高速バス「善通寺本郷通り停留所」から徒歩5分、高松自動車道「善通寺IC」から車で10分です。

電車でお越しの際は、岡山駅から特急または快速をご利用ください。関西方面からお越しの方は、JR 四国高速バス「観音寺エクスプレス（善通寺本郷通り下車）」が便利です。また、四国学院大学敷地内に駐車場（1回300円、23時以降出庫不可）がございます。お車でお越しの方はご利用ください。事前の申込等は不要です。

なお、四国高速バス「善通寺インターバスターミナル」は、会場まで徒歩圏外ですのでご注意ください。飛行機で

お越しの方は、高松空港は最寄りの JR 高松駅までのアクセスはバスのみで、50 分かかります。空港からお越しの際は、レンタカーの利用をお勧めします。

大会開場到着後のご移動について、電車等の公共交通機関は都市部と比べ不便です。善通寺周辺のタクシーの営業時間は 22 時迄です。電車を利用される方はあらかじめ時刻表のご確認をお願いいたします。

・宿泊のご案内

四国学院大学から徒歩圏内に「善通寺グランドホテル」、「善通寺ステーションホテル」があります。また最寄駅である丸亀駅周辺にビジネスホテル、琴平駅周辺に観光ホテルが多数あります。紅葉シーズンと重なる可能性があるため、早めのご予約をお勧めします。

・参加費支払い方法について

前大会までオンライン支払いでしたが、今大会の支払い方法は振込のみです。ご承知おきください。

大会参加費

【一般会員】

事前振込：3,000 円／当日：4,000 円

【学部生・院生会員】

事前振込：2,000 円／当日：3,000 円

【非会員】

(当日受付のみ) 4,000 円／シンポジウムのみ参加: 1,000 円

懇親会費

【一般会員】

事前払込・振込：4,000 円／当日：5,000 円

【学部生・院生会員】

事前払込・振込：2,000 円／当日：3,000 円

【非会員】

(当日受付のみ) 5,000 円

支払い方法

大会参加費・懇親会費の合計額を、以下のゆうちょ銀行振替口座に入金して下さい。

なお事前振込の受付メ切は「11 月 29 日 (水)」です。払込・振込通知の名義は個人 (会員) 名でお願いします。

＜現金または自身の「ゆうちょ口座」から送金する場合＞
日本ポピュラー音楽学会大会実行委員会 (ニホンポピュラーオンカクカクツカイタイカイジツコウイ) ゆうちょ銀行振替口座 (記号・番号) : 00290-8-105674

＜ゆうちょ銀行以外の金融機関から送金する場合＞
日本ポピュラー音楽学会大会実行委員会 (ニホンポピュラーオンカクカクツカイタイカイジツコウイ)
【店名】 ○二九 (ゼロ ニ キュウ)
【預金種目】 当座
【口座番号】 0105674

※送金に係る手数料は各自でご負担くださいますよう、お願いします。振り込まれた参加費・懇親会費は、大会を欠席された場合でも返金出来ませんのでご承知お願いします。

プログラム (暫定版)

12 月 9 日 (土)

12:00 開場・受付開始

13:00～18:00 個人発表

個人発表 A : 13:00～14:30

A1. 中村 栄太 (京都大学)

日本のポピュラー音楽におけるメロディー特徴量の進化分析

A2. 渕上 慧士 (九州大学大学院 芸術工学府 芸術工学専攻 修士課程)

形容語を用いたシンセサイザーの音色検索プログラムの提案

A3. 谷口 文和 (京都精華大学)

初期 DTM ユーザにおけるミュージシャンシップ

個人発表 B: 13:00～14:30

B1. 張 佳能 (大阪大学)

詩と歌の谷間—富岡多恵子の歌謡論について—

B2. 佐久間 由梨 (早稲田大学)

江利チエミと占領期日本のジャズ／売春—ジャズ受容史研究とフェミニズム研究を交差させるとき

B3. 星川 彩 (大阪大学大学院博士後期課程 2 年)

女性シンガーソングライター (SSW) のジェンダー・ポリティクス—地下アイドルとの比較を中心に

個人発表 A: 14:45～16:15

- A4. アニータ・ドレクスラー（大阪大学 人文研究科 博士課程後期課程）
ニューミュージック系男性アーティストのクロス＝ジェンダー・パフォーマンス
- A5. 西田 紘子（九州大学）・澤井 賢一（九州大学大学院芸術工学研究院）
サブスク時代における音楽体験の実態調査—未知の楽曲へのアクセスと推薦機能の関係
- A6. 増田 聡（大阪公立大学）
クロス＝ジェンダード・パフォーマンス再考：中河論文以降の日本語ポピュラー音楽の諸事例を通じて

個人発表 B: 14:45～16:15

- B4. 梶 大也（九州大学大学院 博士後期課程）
本人出演の映画にみる山田耕筰像と《赤とんぼ》：戦後から没時までを中心に
- B5. 福田 祐司（神戸市外国語大学大学院 博士課程（後期））
「日本の軽音楽」の夢、そのつづき—占領期（1945-1952）のポピュラー音楽におけるエキゾティシズムの貫戦史的考察—
- B6. 北波 英幸（関西大学他非常勤講師）
アニソン誕生：アニメの「歌」が生むコミュニケーション・プラットフォーム

個人発表 A: 16:30～18:00

- A7. 井上 裕太（弘前学院大学）
音楽博物館の現在地—ポピュラー音楽系施設の動向を中心に—
- A8. 井手口 彰典（立教大学社会学部）
社会生活基本調査からみたコンサート・ゴアの実像：クラシック／ポピュラーの比較を中心に
- A9. 南田 勝也（武蔵大学）
誰がCDショップを訪れているのか

個人発表 B: 16:30～18:00

- B7. 室之園 直己（大阪公立大学 博士後期課程）
ポピュラー音楽が構築する国境を越えたアイデンティティ：バルカン半島のロックに関する事例研究を通じて
- B8. 安彦 良紀（ブリュッセル自由大学博士課程・大阪市立大学大学院文学研究科言語文化専攻後期博士課程）

ポピュラー音楽が示す多言語国家のローカリティーベ
ルギーのフレミッシュヒップホップを事例に—

- B9. 佐藤 智徳（フリーランス研究者）
カーティス・メイフィールドのソーシャルワーク—1970年代ソウル・ミュージック再考のために

総会: 18:15～19:00

懇親会: 19:00～21:00

12月10日（日）

9:00 受付開始

9:15～12:15 ワークショップ

ワークショップ A

音楽、身体・情動、社会の関係をどのように捉えるか——
「ノリ」と“groove”をめぐる
発表者：小川博司（会員）、野澤豊一（富山大学／会員）
討論者：川本聡胤（フェリス学院大学／会員）

ワークショップ B

方法としての海域音楽交流史：貫戦期の日本をめぐる
発表者：葛西周（京都芸術大学／会員）、麻場友姫胡（英
国王立音楽院／会員）、金成玫（北海道大学／
会員）、西村正男（関西学院大学／会員）、マイ
ケル・K・ボーダッシュ（シカゴ大学／非会員）
討論者：エドガー・W・ポーブ（愛知県立大学／会員）

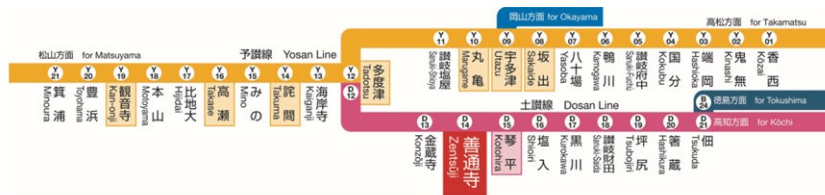
ワークショップ C

「アジア系」ポピュラー音楽における「中間性 in-
betweenness」の諸相：「アジアの東、アメリカの西」再説
発表者：輪島裕介（大阪大学／会員）、忠聡太（福岡女
学院大学／会員）、永富真梨（関西大学／会員）、
アニータ・ドレクスラー（大阪大学大学院博士
後期課程／会員）
討論者：何東洪（台湾輔仁大学／非会員）、ケヴィン・
フェレス（コロンビア大学／非会員）

14:00～17:00 シンポジウム

「三井徹とポピュラー音楽研究（仮）」
小川博司（関西大学）
西島千尋（金沢大学）
野澤豊一（富山大学）
エドガー・W・ポーブ（愛知県立大学）

会場アクセスと JR 善通寺駅時刻表



	多度津 for Tadochi	高松 for Takamatsu	岡山 for Okayama	方面		琴平 for Kotohira	阿波池田 for Awa-ikeda	高知 for Kochi	中村 for Nakamura	方面
4					4					
5					5	51	1			
6	11	高松 1	28	高松 1	6	35	中村 1	48	高松 2	
7	06	高松 1	24	高松 1	7	06	高松 2	45	高松 2	
8	01	高松 1	12	高松 1	8	01	高松 1	18	高松 1	28
9	10	高松 1	39	高松 1	9	18	高松 1	50	高松 1	59
10	11	高松 1	49	高松 1	10	35	高松 1	55	高松 1	
11	20	高松 1	51	高松 1	11	27	高松 1	51	高松 2	
12	19	高松 1	53	高松 1	12	01	高松 1	26	高松 1	58
13	19	高松 1	50	高松 1	13	26	高松 1	56	高松 1	
14	19	高松 1	38	高松 1	14	06	高松 1	26	高松 1	53
15	19	高松 1	37	高松 1	15	07	高松 1	26	高松 1	57
16	19	高松 1	49	高松 1	16	07	高松 1	27	高松 1	
17	30	高松 1	49	高松 1	17	01	高松 1	13	高松 2	31
18	37	高松 1	51	高松 1	18	01	高松 1	14	高松 1	58
19	17	高松 1	43	高松 1	19	05	高松 1	24	高松 1	43
20	19	高松 1	23	高松 1	20	03	高松 1	41	高松 1	
21	08	高松 1	20	高松 1	21	09	高松 1	27	高松 1	
22	16	高松 1	42	高松 1	22	23	高松 1	29	高松 1	
23					23	11	高松 1			
0					0					
1					1					

2023 年度第 2 回オンライン例会 中條千晴

**Gendering Popular Music Studies in Japan [1]
～ Celebrating Sociology of Women Jazz
Musicians by Marie Buscarto**
日時: 8 月 28 日(月) 午後 5 時～7 時 30 分
場所: ZOOM によるオンライン

はじめに

本例会は、2023 年 4 月に青土社より刊行された『女性ジャズミュージシャンの社会学』(原題: Femmes du jazz、以下『女性ジャズミュージシャン』)の刊行記念として、「ジェンダーとポピュラー音楽」というテーマの研究会の第一弾として企画された。著者であり、パンテオン・ソルボンヌ第 1 大学社会学部教授のマリー・ビュスカート氏、また日本においてジェンダーとポピュラー音楽研究を牽引してきた井上貴子会員、小泉恭子会員(あいうえお順)をお招きし、フランスと日本の状況とを比較しながら議論の場を設けることを試みたものである。ワークショップ開催の直前に受けたハワード・ベッカー氏の訃報に際して、開始時にはベッカー氏と交友関係にあったビュスカート氏自身が哀悼の辞を表した。ワークショップ中の発表などは全て英語であったが、質疑応答は永富真梨会員が適宜同時通訳を行った。まず、今回の企画にあたり全面協力をしてくださった南田勝也会員、永井純一会員、そして共にワークショップを企画した永富会員に心より感謝の意を表したい。

本の内容

ここで少し本書の内容について触れるとともに、2020 年代の現代の日本社会に本書が訳される意義について説明したい。文化社会学、労働社会学を専門とするマリー・ビュスカート氏は、本書を通し、フランスのジャズ界に常態化する「水平方向」(ジェンダーに基づいた音楽的な役割の棲み分け)と「垂直方向」(いわゆる「ガラスの天井」の問題)の二つに交差したジェンダーに基づく差別の構造を明らかにする。女性シンガーと女性器楽奏者を取り巻く二重に交差したジェンダー差別は、単なる男性による女性嫌悪的な姿勢や男性主義的な観点

に起因するものではない。女性ジャズミュージシャンをめぐるジェンダー差別の根幹には、ジェンダーをめぐる「社会過程」(社会を構成する個人や集団からの情報が、私たちの思考、行動、感情に影響を与える一連の動的過程)があるのだ。そのような社会構造において女性ミュージシャンが「逸脱」を行うためには、家族や男性配偶者とそのネットワーク、自らの「女性性」を利用していく技術、あるいは逆に女性であることの性的魅力を封じる技術が必要である。そしてその資源は社会的に構築され、今もなお再生産されている。

フランスの事例を取り扱った本書が 2023 年の日本で刊行されることの意義は、何よりもジェンダーと音楽という題材を取り扱った文献が、これまで日本においては僅かであったことにある。確かに 1990 年代後半、スーザン・マクレアリの『フェミニン・エンディング』

(1997) が日本語に訳され、こういったテーマはしばし注目されたものの、2000 年代後半、少なくとも一般社会では周縁化していた。だがここで急いで付け加えておかないといけないのは、日本において音楽とジェンダーに関する学術研究の基盤は、90 年代後半から 2000 年代初頭にかけて、本ワークショップの登壇者である井上貴子会員や小泉恭子会員によって確かに構築されていた。その功績は著者のような世代やもっと若い世代の研究を支えている。2010 年代後半以降、ジェンダーという視座がより一般的に社会に普及するなかで、世代を超えて日本のポピュラー音楽研究界においてこのテーマについて議論し、ジェンダーというプリズムからの音楽分析をさらに発展させていくことが求められている。この背景において本書は重要であり、特に方法論的な見地からも多くの手がかりを読者に与えてくれるものとなっている。

発表

今回のワークショップでは、マリー・ビュスカート氏が著書『女性ジャズミュージシャン』の内容について話し、井上貴子会員、小泉恭子会員が本書に対するコメント・問題提起をもって応答しつつ、さらに日本のポピュラー音楽界におけるジェンダーイシューについての考察を展開するという形をとった。小泉会員、井上会員のコメント、質問については次節にて詳しく展開することにし、まず三者の発表内容について述べる。

ビュスカート氏は、「女性ジャズミュージシャンの社会学」の核ともなる自身のエスノグラフィー調査の分

析、とくにジャズ界における「社会過程」の構造について詳しく説明した。そして結論として、ほとんどの音楽界は、地理的条件に関わらず、数字的にも、表象的にも、社会的にも、非常に「男性的」であることに変わりはなく、上述したような「社会過程」が時間をかけて積み重なり、女性が音楽界に参入し、立場を維持し、正当なミュージシャンとして認められることを妨げていると指摘している。また、「母性」という観点が、たとえそれが女性ミュージシャンの軌跡（業界から退く、時間がたっていない、否定的なステレオタイプを生むなど）に影響を与えているとはいえ、音楽界における彼女たちの疎外を説明する主要な問題には未だなり得ていないとも指摘した。

続いて小泉会員が、日本においてジェンダーをめぐる議論、その研究の変遷を、日本の社会的背景にも触れながら辿った。先ほど著者は、ジェンダーと音楽を取り扱った文献は僅かであったと書いたが、実は学術研究においてはこのテーマは定期的に取り上げられている。2000年代には音楽における男性性をめぐる議論も展開し、2009年にはトリーシャ・ローズの『ブラック・ノイズ』が訳され、2010年には論集『視覚表象とジェンダー』（池田忍、小林緑編）が刊行されている。周縁化されていたとはいえ、ジェンダーというテーマを取り扱う音楽研究は少なからずあったことが明確に分かる小泉会員の報告からは、「誰が」「どのようなかたちで」「何のために」このテーマを周縁に追いやってきたのかという問題提起について考えずにはいられない。

また一方で小泉会員は、「女性ジャズミュージシャン」でも取り上げられていた「ビッグマリオン」の例についても批判的かつ発展的に触れる。というのは、例えば映画業界では、映画プロデューサーになる前に男役俳優として活躍し、石原裕次郎などのスターを発掘した初の女性映画プロデューサーである水野滝子がいるように、「逆説的なビッグマリオンの関係」が発生する可能性もあるのだ。小泉会員は、このような「逆説的ビッグマリオンの関係」は稀であるが、こういったケースを理論的に分析し、研究を深化させる必要があると述べる。

さらに小泉会員はビュスカート氏に応答する形で、日本のジェンダーと音楽を考える上で重要な三つの社会的コンテクストを挙げる。すなわち、「音楽産業」、「教育」そして「労働」である。小泉会員はまず松任谷由実を研究したフィンランドの音楽学者、ラッセ・レヘトネ

ンの研究を紹介し、松任谷以前にも男性優位の業界において女性アーティストが存在したことを指摘する。彼女たちの共通点は宣教師学校の教育であり、そこでは宣教師学校では倫理教育が重要視され、外国語教育も行われた。小泉会員は、これらの学校での教育が、彼女たちが独立心を培い、男性優位の音楽業界で成功する要因となっているのではないかと考察し、音楽業界の歴史を再評価し、女性先駆者に焦点を当てる必要があると主張する。

井上会員は、ビュスカート氏によるジャズのケーススタディとロックのケーススタディを比較し、音楽とジェンダーに関連する核となる問題、特に男性的な世界における女性の位置と、ジェンダーをめぐる表象についての問題を、歴史的な変遷に言及しながら取り上げた。

ロック音楽、特にハードロック・ヘビーメタルは、反抗的な男性志向の音楽とされており、バンドは男性美学を実現するためのコミュニティとされ、ジャズ同様女性ロックミュージシャンの数は限られている。そこで1990年代にはロックシーンにおける性差別と女性排除が注目され、なぜ男性がロック音楽を通じて男らしさを築こうとするのかという問題が検討された。ロックミュージシャンは自己表現のために性的イメージを操作する戦略を用いるという観点から、ヴィジュアル系のメイクなどが「逸脱」を強調する手法であると井上会員は指摘する。さらに、60年代のロックシーンにはロックの「ディーヴァ」が登場したが、彼女たちは男性ミュージシャンやバックバンドのサポートを享受し、それに依拠する立場にあった。しかし70年代半ばにはより独立した女性ミュージシャンが登場し、女性たちがバンドを結成する動きが広がり、80年代のフェミニストパンクが台頭を経て、90年代初頭にはRiot Grrrlムーブメントが起こっている。

日本では、70年代にはロックディーヴァも登場したが、井上会員によると彼女たちもまた男性ミュージシャンや男性バックバンドに支えられ、バンドメンバーとしての立場は弱いものであったという。一方で80年代から90年代にかけて、J-popシーンでもロックバンドが人気となり、女性バンドやロックディーヴァの中には成功を収めたものもある。これが21世紀に入ると、ロックシーンはマンガやアニメ、アイドル文化などの影響を受け、女性ミュージシャンをアイドルとして扱う風潮が高まる。そして2010年代以降、このようなポピュラー文

化との交差の影響を受けた女性バンドが日本で非常に人気となる。ヴィジュアル系ファンカルチャーやコスプレサブカルチャーの影響で、あらたなジェンダー観が生まれる。井上会員は、この風潮の中でロックは「逸脱」の表現から日常的で定型化された音楽へと変化したのではないかと結論づけた。

議論

上記のようなフランスのジャズ界と日本のポピュラー音楽界におけるジェンダーをめぐる問題の類似性、また差異を考慮しつつ、小泉会員と井上会員は『女性ジャズミュージシャン』の内容、またビュスカート氏の調査についてコメント、および問題提起をした。発言と応答の順序が前後するが、議論に発展したものを以下にまとめたい。まず、双方から、フランス社会におけるジャズの社会的位置付けについて質問が出た。アメリカ発祥であり、元来、抑圧された人々、いわゆる「下層階級」の表現であったカウンターカルチャーとしてのジャズの位置付けは、フランスではより高尚な文化となっているのか。また、両会員に加えて、永井純一会員からも、ジャズのジェンダーをめぐる問題は世代や職業（あるいは音楽ジャンル）によって異なるのかという質問があった。これに対してビュスカート氏は、まず、今や全世界的にジャズの社会的位置は大きく変わっていると看做す。日本であれアメリカであれ、ジャズは比較的アッパーな、教育された中産階級が嗜むニッチなものになった。この経済・社会的な位置付けの変容は、世代や職業によって状況に差はあるかというもう一つの質問にも答えることになるという。すなわち、「高尚でニッチな芸術となった」ジャズにおいて、女性たちが「社会化」を求められる環境、そして年齢を重ねるにつれ立場が弱くなっていく状況は変わらない。だが同時に「職業によって状況は異なるか」という質問に対しては、例えば演劇の世界のように状況によりジャズの世界の分析が当てはまる場合もあれば、ロックのように当てはまらない場合も多々あり、その職業の世界における差異にはやはり慎重にならないといけないという。

また、井上会員からは、原著では「Transgression」とされている「逸脱」という概念および訳についても指摘があった。本来「逸脱」の英訳は「Deviation」であり、既存の異性愛社会、家父長制社会からの逸脱を意味しているが、『女性ジャズミュージシャン』ではどのような

意味で使われているのかという質問である。これに対しビュスカート氏は、本書のなかで「Transgression」は、男性性の支配する仕事の世界に女性たちがどのように参入していくのかに焦点を当てて使用されている、と答えている。実は「Transgression」の訳については、訳者である著者も頭を悩ませた。カルチュラルスタディーズなどの領域では「侵犯」という訳が一般的である語彙だが、フランス語学者である渡邊淳也氏の「超えてかなたに (trans)」「進む (gression)」という解釈、つまり「現行の規範になっていないことではあるが、そのことにより、慣用を少しづつ改変してゆく原動力として、動的に、かつ肯定的にとらえなおすこと」(『La transgression: de l'émancipation à la progression』渡邊淳也 2014 144-145) という解釈を踏襲し、この選択に至った。ただ、ビュスカート氏の方法論の依拠するベッカー氏の著書『アウトサイダーズ』(邦訳 1993) においては、逸脱という語彙は「déviance」に対応しており、今後議論、検討の余地はあるだろう。

最後に南田勝也会員より、方法論に関して、ベッカーの「ラベリング理論」は普遍性があるか、という質問があった。この質問に対してビュスカート氏は、フランスにおけるブルデュー派とベッカー派の方法論的「対立」にも言及しつつ、研究対象となる音楽分野によっても適性は変わるのでは、と返答している。例えばオペラの世界を研究するのであれば、ブルデューのディスタンクシオン論の方が適切である、というように。ビュスカート氏は結論として、ジャズ界のジェンダーを扱う上ではベッカーの理論が適していると判断した、と答えている。これは私見だが、芸術の世界における社会構造のヒエラルキーに、スティグマとして硬化したものをみるか、あるいはまさにそこから「逸脱」が生まれるとみるかで判断が分かれるようにも思える。

今回の発表および議論では、単にポピュラー音楽における女性たちの位置付けに関する議論のみにとどまらず、ジェンダーをめぐるポピュラー音楽の世界、それを研究対象として分析する世界においてどのような試みがなされているのか、何が課題であるのかについて重要な手がかりとなる議論が交わされた。この「第一回」を機会に、今後同様のテーマに関する活発な学術的取り組みが展開できることを願ってやまない。

(中條千晴)

事務局より

1. 登録情報に変更が生じた場合について

所属・住所・メールアドレスなどの登録情報に変更が生じた場合、できるだけ早く SMOOSY (会員マイページ) にログインし、ご自身で修正作業を行ってください。変更がない場合、学会誌や郵便物、メールニュース、例会のお知らせがお手元に届かないなどのご迷惑をおかけするおそれがございます。修正項目の入力の際には、入力内容にお間違えがないようご注意ください。

2. 退会の届け出について

本会の退会を希望される場合、速やかに学会事務局 (jimu@jaspm.jp) までお知らせください。

3. 会費請求と学会誌について

2023 年 5 月に、2023 年度の会費請求書類を、学会誌 Vol.26 (2022) と一緒に会員の皆様のお手元にお届けしました。

学会誌 Vol.26 (2022) は 2022 年度の会費納入者にお送りしておりますので、学会誌が同封されていない場合は、速やかに会費を納入いただきますようお願いいたします (会費納入後、学会誌を送付いたします)。

また、滞納分の会費納入をしたにも関わらず、学会誌が届いていない場合には、入れ違いや何らかの手違いが発生している可能性がありますので、お手数ですが事務局までご一報ください。

4. ニュースレターについて

従来、ニュースレターは学会ウェブサイト掲載の PDF で年 3 回 (春夏冬)、紙の冊子で年 1 回 (秋) 刊行していましたが、128 号以降のアナウンスで、「秋期の刊行は会員システム SMOOSY (会員マイページ) 上での公開に移行」とされました。ただし、コロナ禍において例会が中止になったり大会の時期がずれたりするなどして、研究活動に連動するニュースレターの編集はスケジュール通りの定期刊行を果たせませんでした。

そこで 134 号 (今号) より、複雑な刊行システムを改め、秋号についても学会ウェブサイト掲載の PDF で発刊することといたします。すなわち、すべてのニュースレターは学会ウェブサイトに掲載する形となります。

本紙のバックナンバーについては JASPM ウェブサイトのニュースレターのページに掲載されています (URL : https://www.jaspm.jp/?page_id=213)。

また、これをうけ、紙の冊子で発行していた時代にニュースレター誌上に掲載していた「会員動静」については、入退会員の氏名と所属を記すに留めることにしました。

新入会員の連絡先等については、まずは先日学会誌と同封して配送しました最新の会員名簿をご覧ください、未掲載の場合は、以下の条件を満たすかたちで事務局に電子メールにてお問い合わせください (jimu@jaspm.jp)。なお、メールによるお問合せへの対応は、次の会員名簿発行までとさせていただきます。

▶新入会員の連絡先等のお問い合わせにあたっては、SMOOSY に登録してあるメールアドレスを使ってメールを作成し、メールの文中に、必ずご自分の会員番号を明記してください

▶お問い合わせの際、会員本人の希望により個人情報を公開することが出来ない場合がありますので予めご了承ください

会員動静

■入会者

石川琢也 (京都芸術大学クロステックデザインコース専任講師、情報科学芸術大学院大学後期博士課程)

竹本万里

室之園直己 (関西学院大学大学院文学研究科文化歴史学専攻博士課程前期課程)

西森真菜 (関西学院大学大学院文学研究科博士課程前期課程)

菊池虎太郎 (大阪大学人文科学研究科博士前期課程 1 年)

岸本寿怜 (関西学院大学文学部文化歴史学科学部生)

Lasse Lehtonen (ヘルシンキ大学研究員 (博士))

寺西厚史 (大阪大学大学院人文科学研究科音楽学専攻博士後期課程)

和田理恵（東京大学大学院人文社会系研究科宗教学宗教
史学研究室）

北波英幸

松本迪大

佐藤智徳（フリーランス研究者）

堀海斗（武蔵大学人文科学研究科博士課程前期課程）

■退会者

井上秀二

小林貴

山浦美保子

三井徹

ロズアリス

大久保真由

大角欣矢

棚谷祐一

陳麟

鳥越けい子

波止康雄

畑公也

古川光流

増田久未

宮坂遼太郎

吉川飛空

吉野麻子

まつもとたくお

*2022 年第 3 回理事会以降承認分。敬称略。

JASPM NEWSLETTER 第 134 号

(vol.35 no.3)

2023 年 9 月 30 日発行

発行：日本ポピュラー音楽学会（JASPM）

会長 増田聡

理事 安田昌弘・周東美材・小泉恭子・
永富真梨・大和田俊之・南田勝也・
永井純一・溝尻真也

学会事務局：

〒606-0016

京都府京都市左京区岩倉木野町 137

京都精華大学メディア表現学部

安田昌弘研究室内

jimu@jaspm.jp（事務一般）

jaspmkk@gmail.com（ニューズレター関係）

<http://www.jaspm.jp>

振替：

00160-3-412057 日本ポピュラー音楽学会

編集：南田勝也・永井純一